

薬造教室での様子

木村 哲雄（1期）

分析実習が、医学部の空き実習室で行われたように、薬品製造学教室も教授室は離れた二階に置かれたが、実験室は法医解剖室の空き部屋 2 室から始まった。殺人事件があると、遺体が毛布等に包まれて廊下に置かれ、隣室で解剖が始まる。最初は異臭に悩まされたが、不思議なもので慣れてくると、全く気にならなくなった。予断ながら、片方の部屋の地下には遺体を保存したと思われるスペースがあった。

2 部屋に先生が金岡助教授他 3 名、学生が 8 名で窮屈ではあったが、夫々与えられた研究テーマに取り組んでいた。各自テーマが異なるので、研究の進み具合に差はあったが、数少ないガラス器具や

薬品を融通し合い、楽しい実験室だった。その後、医学科で空き部屋ができたので教授室に近い二階の広い実験室に移った。

研究室の雰囲気は、教授以外は皆独身だったので、夜遅くまで実験に励み、時には帰り際に軽く一杯引っ掛けることもあったと記憶している。実験の進み具合の発表やセミナーは教授室で行われ、時には終了後にジンギスカンパーティーで楽しんだ。先生と学生の年齢差が逆転している例もあり、先生と生徒の関係よりも、より親密な関係にあったと思うのは、卒業後も親しくお付き合いできたからである。

同窓会 HP:2022 年 10 月 26 日公開



写真-1 1957 年頃 伴教授が着任前の薬造一期生

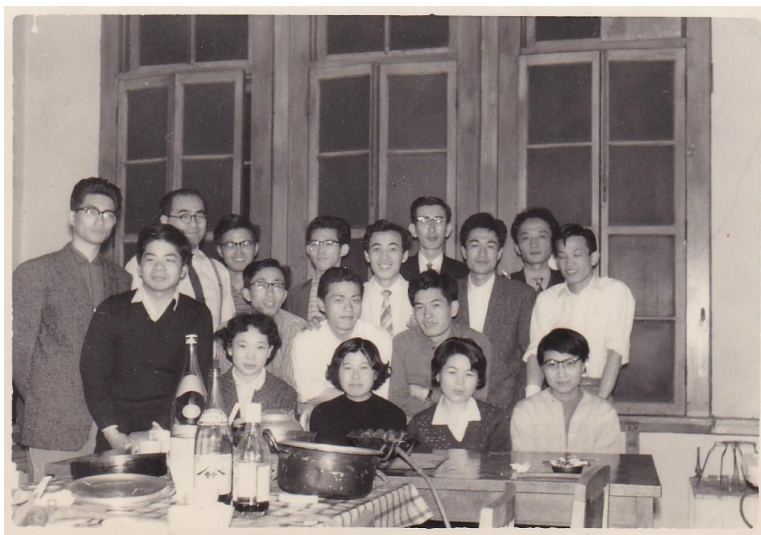


写真-2 1958 年頃 二期生が移行後のジンギスカンパーティー